

研究ノート

市民として社会にかかわる契機としての
「まちのことばをつくる」プロジェクトの可能性

佐野 香織

(長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科)

“Creating a language in the city”

—A project as an impetus of social participation—

Kaori SANO

(Department of International Tourism, Faculty of Human and Social Studies,
Nagasaki International University)

Abstract

The purpose of this study is to qualitatively examine how a diverse group of people living together in a city think about the language of the city and co-create it. The city, which has a university, is a multi-ethnic community made up of local residents, short-term and long-term residents, and international students who come and go every day. International students are not only temporary customers but also citizens of city, and as such, they share the responsibility for creating a safe and comfortable living environment. This attitude—thought to be the foundation for building sustainable cities anywhere in the world—also applies to the other citizens of city. This study will share reflections on this process from a critical literacy perspective.

Key words

Creating a language in the city, Educational Applications of Linguistic Landscape, Critical Applied Linguistics, Creative learning

要 旨

本研究は、「言語」「ことば」について概観した上で、「街のことばを知る、考える、創る」プロジェクトにおける、「まちのことば」を考える過程を考察するものである。本プロジェクトの参加者は、キャンパス近郊に住む者も多く、大学キャンパス内、キャンパス近辺、キャンパスと隣接する商店街で日々を過ごしている。本プロジェクトは日常を営むまちでことばを知り、まちのことばがどのようなものであるかを学ぶだけでなく、自分はどのようにまちのことばに関わるのか、今後自分がどのようなことばの使用者になるのかについて考えていくことを目的としている。本研究では、クリティカル・リテラシーの観点から、このプロセスについて、留学生と商店街店主の「まちのことば」観に焦点をあてて考察する。

キーワード

まちのことばをつくる、言語景観の教育応用、批判的応用言語学、クリエイティブ・ラーニング

I はじめに

近年、社会を考える表現として、「多文化共生」、「多言語」という表現が多く使われている。

特に、多言語の「言語」とはどのようなものであるのか、そもそも「規定」することができるものであるのか、詳しく議論されないまま用い

られているのが実状である。

多様な人々が行き交い、そして移り住むまち¹⁾には、代々その地域で生きてきた地元住民、短期・長期の生活者、移住者、留学生などが市民として日々暮らしている。こうしたまちでは、多様な言語資源を積極的に活用し、市民が共にことばを考える機会が重要である。まちに対応した新たなことばの教育が求められている(尾辻, 2016)。この意味では、留学生もまた、まちの市民であり、市民として安全で快適な暮らしを営む権利と責任、共にまちをつくることを考えていく価値観が重要である。こうした考えが、世界においても持続可能な新たなまちを考え、構築していく市民性形成につながると考えられる。

こうした背景から、「自分はどのようにまちのことばに関わるのか、今後自分がどのようなことばの使用者になるのか、どのようにことばを学ぶのか」ということについて、多様なまちの人々が共にことばを考える契機としてのプロジェクトを行った。本稿は、このプロジェクトにおける「まちのことば」の意味を考えるプロセスについて考察することを目的とする。

II 先行研究

1. 「まちのことば」の「ことば」に関わる研究

「言語」は、特定の社会において集団をつなげる、まとめる役割を果たす一方で、その「言語」を用いる社会のルールや規範に何らかの理由で沿えない、または沿っていると見なせないものに対しては、排他的な側面を持つものであることが指摘されている。また、「言語」は、狭義の意味においては、文法や語彙を正しく使うことができれば、その言葉の意味は「正しく」相手に理解されるととらえられがちであることも言われている(佐藤, 2017)。このように「言語」を考える場合、「言語」は多くの人が排除される装置として働く可能性がある。例えば、まちの多くの外国人、移住者、留学生はどうで

あろうか。そのまちで使われる「言語」を習得できない場合は、まちにかかわる前に排除される存在であり続けるのであろうか。まちの住民とかかわりながら、「言語」ではなく「まちのことば」としての「ことば」を共に考えていくことが重要であると思われる。

「言語」には、日本語、英語、中国語、フランス語、といった「言語」に民族、国家イデオロギー的な個別性を表す名称がついていることが多い。しかし、超多様性を包摂する現代社会においては、このような「言語」で実際の社会での言語使用状況をとらえるのは不可能であることが指摘されている(Pennycook, Otsuji, 2014)。こうした状況においては「レパトリー」という概念で言語使用を考えていくことが有用であるとされてきている(Garcia, Li Wei, 2014; Pennycook, Otsuji, 2014)。尾辻(2016)は、レパトリーとは「常に動的に言語使用を通して構築されていくもので、他者と交わる中で個人はそのレパトリーを駆使しながら、創造的に「ことば」、そして自分の場を作っていくと言えるのではないか」(尾辻, 2016: 35)と述べ、これが市民性形成につながっていることを示唆している。

本研究では「ことば」を「日々の営みの中で、人と人、人と場、人と環境等、人が関わって用いられるもの」として考えている。その「ことば」は決まった形式や定まった形式を持つものではなく、日々の多様な言語資源を用いた言語プラクティスからつくられるものであると考えられる(尾辻, 2016)。留学生もことばを構築する市民の一員であるといえよう。本研究では、このような「ことば」は「まち」でどのように人が関わりつくられていくのかを考えていきたい。

2. 応用言語教育学的な観点からの言語景観研究

本プロジェクトでは、「まちのことば」をとらえるために、言語景観(Linguistic Land-

scapes) による実践を行った。言語景観とは、「景色のなかのこぼ」(中井精一, ダニエル・ロング(編), 2011)、「公共空間にあり、不特定多数に向けられている、受動的に視野に入る書き言葉」(磯野, 2020) と言われるものである。公共空間の看板、サイン等を含むものであり、公共施設や公共利用物にある非商用の公共表示と、街中に存在する企業や商店の掲示物などの民間表示がある。

近年、言語景観は様々な分野の研究・実践に用いられている。言語教育分野においては、Cenoz, Gortor (2008) が言語景観の第2言語習得に果たす役割について、マルチモーダルな語用論的能力の獲得に結びつく可能性に言及している。日本語教育においては、言語景観から地域の特徴や社会的背景を読み解く「視点の習得」に主眼をおいた視聴覚教材の開発(西郡他, 2014)がある。磯野(2020)は、視聴覚教材開発を基に言語景観そのものを授業の中心に据えた多文化コミュニケーションの科目を実践している。これらは、言語景観を観察することを通じて、日本語の多様性、ディスカッション、プレゼンテーション等を学ぶことが主眼となっているものである。以上の研究においては、言語景観からコミュニケーション能力といった「能力」を身に着けることに焦点があるといえる。

一方、言語景観を用いて、社会にかかわり、社会参加することや、市民性形成をめざしたこぼの教育を考える研究もある。Malinowski, Dubreil (2019) は、言語景観と第2言語学習研究の概観をする中で、言語景観を用いた教育実践が市民性形成、社会変革につながる可能性を指摘している。このような志向を持った言語教育としては、「内容重視の批判的言語教育(Critical Content-Based Instruction)」が挙げられる。熊谷(2018)は、この考え方の中で行われた教育実践である。熊谷(2018)は、言語景観を言語教育に取り入れることについて、地域・コミュニティのこぼや、言語を創りだす人々の動機、イデオロギー、人々の意思決定を理解し、

言語景観の変革に関わることもつながるものであるとしている(熊谷, 2018)。しかし、こうした観点から言語景観をこぼの教育に取り入れた実践は多いとはいえない。

本研究は、多様な人々が「まちのこぼ」をつくる契機を探るプロジェクトを扱うものである。社会変革、市民性形成をめざす観点から言語景観を用いると同時に、実践に際しては「こぼをつくる」という、つくることによって学んでいく姿勢を取り入れることが求められる。

3. 「こぼをつくる」学び—クリエイティブ・ラーニング

つくことで学ぶ、という考え方の背景には、省察的実践論(ショーン, 1983/2007)、クリエイティブ・ラーニング(井庭(編), 2019)がある。この考え方の背景には、省察から創造される学びについて言及していること、既存の理論の鋳型に学びを押しこめるのではなく、その学びを新たに学びをつくることにつなげ、新たな社会につなげていこうとする志向がある。井庭(編)(2019)は、クリエイティブ・ラーニングの学びの考え方における「教師像」は、知識教示のイメージのある「ティーチャー」や、「インストラクター」ではなく、人々の対話の流れを支援する「ファシリテーター」とも異なることを指摘している。そして、「ジェネレーター(generator: 生成する人)」という新たな教師像を示した。ジェネレーターとは、自らも共に学び手としてつくことに参加し、「つくり手チームの一員として、創造を進めるとともに、そのためのコミュニケーションも誘発していく」(井庭(編), 2019: 158) 存在であるという。つくことで自らも手を動かしながら、学生・生徒の学びのプロセスを見極めながら、必要なヒント、支援を出していく。ジェネレーターは、つくことで学びながら、その学びをつくる存在であるともいえよう。本研究においては、筆者はこのジェネレーターの立場でプロジェクトをつくること、共にこぼをつくるこ

とをめざした。

Ⅲ プロジェクトの概要

1. プロジェクト詳細

本プロジェクトは、筆者の勤務校（当時）の2018年度秋学期（10月～1月）、留学生対象日本語科目「街のことは知る、考える、創る」において行ったものである。このプロジェクトでは、「学生が日常を営むまちでことは知り、まちのことはどのようなものであるかを学ぶだけでなく、自分はどのようにまちのことに関わるのか、今後自分がどのようなことばの使用者になるのか、どのようにことばを学ぶのか、考える姿勢を養う」ことをめざしている。本プロジェクトにおいては、クラス、キャンパス、隣接する商店街、地域を「まち」として考えている。授業開講に先立ち、大学近辺の商店主とプロジェクト内容について話をし、本授業の考え、プロジェクトの内容に賛同してくれた商店主2名と商店会会長を中心に、大学周辺商店街の商店主有志の協力を得た。

2. 実践方法

本プロジェクトにおける実践は表1のように行った。

このうち、本研究で取り上げるのは、③、④、課外のプロセスである。

③では、言語景観による実践を行った。本研究では、留学生が商店街のことは知り、自分

たちがどのように関わっているか、関わっていないか、これからどのように考えていきたいか、という点から、商店街の言語景観観察をした。この観察を踏まえて、留学生はグループで商店街の中でかかわりたいお店を選び、そのお店とまちと人をつなぐことばとしての「ポスター」を作成した。「ポスター」の形状は自由、としたため、冊子状にしたもの、ポスター状に印刷したもの等様々なものがあった。また、表現方法も、写真を多用するグループ、絵を描いたグループ、文字情報を中心にしたグループなど多様であった。

3. 研究方法

プロジェクト実践後、プロジェクトでポスターを作成した留学生（5名）、商店街商店主（2名）に任意のインタビューを行った。インタビューの内容は、「プロジェクトにおけるまちのことはどのようなものであると思うか」というものである。インタビューは録音し、文字化したものをデータとした。本稿では、このデータのうち、「まちのことは」に関する部分に注目し、質的データ分析法（佐藤，2008）で分析を行った。

(1) 筆者の立場

本研究における筆者の立場は、「ジェネレーター」として実践を行い、「参加者としての観察者」（メリアム，1998/2004）として分析を行っ

表1 「街のことは知る、考える、創る」授業概要

	週	授業	内容
①	1～3	オリエンテーション クラスのことは	まちのことはとは。プロジェクト趣旨説明 クラスのことは知り、考え、つくる。
②	4～6	キャンパスのことは	キャンパスのことは知り、考え、つくる。
③	7～9	まちのことは	商店街のことは知り、考える
④	10～15	ポスター作成 ふり返り	商店街の中でかかわりたいお店を選出、お店との交渉、許可を得て作成。中間相互評価を経て最終発表。
課外		ポスターをお店に 持っていく	ポスターをお店に持っていき、店主に渡した

た。本研究は、実践を通してつくることで学ぶことをめざすものである。そのため、「こぼれをつくる」プロセスを通して、本授業を行い、プロジェクトを共に進めた担当教員／ジェネレーターとしての視点から、つくることによって学ぶ様相を見ていく。また、担当教員は、考察には、活動中および活動後に留学生が書いたふり返しシートと、ふり返しノート、活動後に行った協力者である商店主へのインタビュー（文字化資料）を用いた。

(2) 研究倫理に関する配慮

本プロジェクトの参加者で研究協力を申し出てくれた研究協力者に対し、研究の目的、公開にあたっては匿名性を守ること、研究の途中撤退可能であること等書面をもって丁寧に説明し、研究への了承を得た。なお、本研究開始にあたっては、早稲田大学日本語教育研究センター研究調査倫理委員会の承認を得ている（承認番号1414）。

IV 分析と考察

本稿では、プロジェクトに参加した留学生、および協力した商店主にとっての「まちのこぼれ」の意味に焦点をあて、記述する。

1. 留学生にとっての「まちのこぼれ」

① 傲慢

「傲慢」の意味の語りとして次のようなものが見られた。

「言語景観の観察や分析で学ぶことはとても多かった。しかし、コミュニティの一員になったばかりの自分たちが、長い歴史や文化を持つお店の人に、短期的な考えから「こぼれ」の変容を促すようなものをお店の人に渡したくない。傲慢なのではないか」（原文は英語：筆者訳）

留学生は、「まちのこぼれ」について考えつ

くるプロセスに、自分たちのまちへの貢献の可能性を見出していた。例えば、漢字中心の文表現に絵やピクトグラムをつけ、ふりがなもつける、というようなことも考え出し、ポスターの中でお店に提案している。それはその社会における少数者が抵抗や戦略的に用いる言語の創造性の一面であるともいえる（久保田，2008）。しかし、それを実際にコミュニティで使っていくことを考え、促進していく立場となった時、留学生は創造性や多様性よりも、自分たちが「日本」のコミュニティで思い描く標準的で理想的な想像の日本語や、その日本語の使用者を中心に考えている可能性がある。「想像の言語共同体」（アンダーソン，1997/2007）のこぼれの所有者は自分たち留学生ではない、と考えていることが窺える。

② 想像の「日本」の破壊回避

「想像の言語共同体」の日本語像が留学生の中で大きな位置を占めている可能性は、次のような語りからも窺える。

「漢字をたくさん使う日本語の表示を変えてしまったら、私の考える大好きな『日本』じゃなくなる」（原文は英語：筆者訳）

まちのこぼれに言語の創造性の力を見出す一方で、「これは私の好きな日本の「日本語」ではない」、「だから変えるのは嫌だ」という考えから出たものである。この場合、まちのこぼれの意味は、留学生も共につくっていく、という考え方ではなく、まちの鑑賞者としての立ち位置であることが窺える。

2. 商店主にとっての「まちのこぼれ」

① 試食用のいちごジャム

商店主のこぼれの中に現れる「まちのこぼれ」としては、「試食用のジャム」を中心としたものが多く見られた。商店主が営むお店は、全国の生産者とつながり、環境問題への配慮、生産

者や作り手の想い等、商店主の目にかなった逸品が並ぶお店である。その中に、商店主が一押し「いちごジャム」があった。

留学生がこの商店主のお店を訪ね、商店主と話をしていく、というかわりが増える中で、商店主の中に、留学生、お店を訪れる客、商店の従業員をつなぐ何かがあると欲しかったそうである。そこで、多くの人が絶賛する「いちごジャム」を、試食用としてお店の外に出しておいたところ、この「いちごジャム」を通してさまざまな「ことば」が生まれた実感があったという。店に並べられたいちごジャムを購入する際には、店員と購入者間の最低限のやりとりだけしかなかったそうである。しかし、店の外に試食用のいちごジャムを置くことで、見知らぬ客同士が共に試食をした後にそのおいしさに声を挙げ、感想のことばを言い合う場面があったという。また、店の中には入っていけないが、試食をする合図を店の外から送る留学生もいたそうである。このような、人と人の中に生まれた「ことば」の中心に「いちごジャム」があったことについて語っていた。

② 「英語」ではない「まちのことば」

最初に筆者が「(留学生を含む)多様な人とまちとの間にことばをつくる」ことについて相談をした際には、「うちのパートさんも自分も英語ができないからな」ということが第1声としてあった。しかし、店に留学生が客として訪ねた時の話などを担当教員と話したり、従業員同士で話したりする中で、大きく変わってきたという。最も大きく変わったと実感していることは、店主自身も従業員もそれぞれ様々な形で様々な人とのかわりが増えたということであった。それは多様な「ことば」の経験をしたことが大きいという。

こうした「まちのことば」観として、店主は以下のようなことを語っている。

「ことばって、人を笑顔にさせるものだと思う

ていて、安心させるじゃないですか。話してもいいんだっていうふうに、話せる相手なんだっていうふうに思ってもらえることが僕、大事だと思うので」

「ことば」は、「英語」のような言語名がつくものというイメージから、その時に「人を笑顔にするもの」であるという認識への変化が窺える。

③ 「まちのことば」への戸惑い

一方で、留学生からの「ことば」の提案に対し、戸惑いの声も見られた。「まちのことば」として留学生が「ポスター」を作成していることは知っていたが、留学生がお店に提案したいことに対してどのようにしたらよいか悩んでいるというものである。例えば、留学生が作成したポスターの意図と、商店としてのお店の機能が対立するようなものがある時、どうしたらよいか戸惑いがあることが語られていた。

CD ショップの店主から言われたこととして、次のようなものがあった。留学生のポスターの中に「CDの並べ方があいうえお順」という指摘があったという。例えば、留学生にとって、歌手名の「urban」はすぐにカタカナで「アーバン」に変換することが難しいため、気をつけて探したほうがいい、ということだったようである。

しかし、これに対し、次のような戸惑いが語られていた。

「CDの並べ方をabc順に、って言われたんだけどねえ。うちは高齢者が多いから、カタカナじゃないと分かんないよって」

留学生の考えは分かったが、現実のこれまでの状況とどのように折り合いをつけていくのか、考えるきっかけになっていることが窺える。

V おわりに

留学生は短期間のまちの「お客様」として「こことば」にかかわるだけでなく、まちの市民としてまちをつくることに貢献したいという気持ちを持っている（佐野，2018）。しかし、本プロジェクトを通して、その「まちのこことば」をとらえる想いはそれぞれ複雑であり、異なる背景を持つ人と「まちのこことば」をつくるということは簡単ではないことが分かった。同時に、日本での「地域における多文化共生」の内実も窺えた。

本プロジェクトは、留学生、店主がともにかかわる中で「こことば」をつくるきっかけとはなったが、多くの課題も残った。まず、本プロジェクトでは、全関係者が共に会して相互評価をし、意見を述べ合い、次の「まちのこことば」をめざす機会を持つことはできなかった。共につくる人（ジェネレーター）として、共に「まちのこことば」をつくる機会や実践をどのようにつくっていくのか、今後の課題としていきたい。「まちのこことばをつくる」には、学生、教員、協力者も共にお互いを認め合いながら、葛藤も軋轢も繰り返し重ねながら、考え続ける長期のスパンとプロセスが必要である。

付 記

本研究は、W-BRIDGE 第12期研究・活動助成「SDGsをめざす『Action』による新たな社会価値創出」の助成を受けている。

謝 辞

本研究は、大隈通り商店会、アトム通貨実行委員会新宿支部に多大なご協力をいただきました。感謝申し上げます。

注

- 1) 本プロジェクトにおいては、クラス、キャンパス、隣接する商店街、地域を「まち」として考えている。しかし、科目名については「街」を使用しているため、そのまま用いている。

参考文献

- アンダーソン, B (1997) 白石さや, 白石隆 (訳)『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』NTT出版.
- 磯野英治 (2020)『言語景観から学ぶ日本語』大修館書店.
- 井庭崇 (編) (2019)『クリエイティブ・ラーニング：創造社会の学びと教育』慶應義塾大学出版会.
- 尾辻恵美 (2016)「生態的なこことばの市民性形成とスペーシャル・レポトリリー」『市民性形成とこことばの教育—母語・第二言語・外国語を超えて』細川英雄, 尾辻恵美, マルチェッラ・マリオッティ (編) (pp.209-230).
- 久保田竜子 (2008)「こことばと文化の標準化についての一考」佐藤慎司, ドーア根理子編著『文化, こことば, 教育』明石書店.
- 熊谷由理 (2018)「言語景観プロジェクトへのCCBIの可能性. 批判的言語教育国際シンポジウム未来を創ることばの教育をめざして」発表資料. (http://www.cocopb.com/ccbicconference/schedule_files/CCBI180701_yuri_kumagai.pdf 2020年1月20日アクセス)
- 佐藤郁哉 (2018)『質的データ分析法』新曜社.
- 佐藤慎司 (2017)「こことばとは? こことばの教育とは?」佐藤慎司, 佐伯眸 (編)『かかわることば—参加し対話する教育・研究へのいざない』東京大学出版.
- 佐野香織 (2018)「街のこことばに関わることばの教育の可能性—言語景観を活用した日本語授業事例から」日本質的心理学会第15回大会発表資料.
- ショーン, D. A. (2007) 柳沢品一, 三輪建二 (監訳)『省察的実践とは何か: プロフェッショナルの行為と思考』鳳書房. (Schön, D., A. (1983) *The Reflective Practitioner: How professionals think in action.* London: Temple Smith)
- 中井精一, ダニエル・ロング (編) 内山純蔵 (監) (2018).『世界の言語景観日本の言語景観: 景色のなかのこことば』桂書房.
- 西那仁朗, 磯野英治 (監) (2014) ビデオ教材『東京の言語景観—現在・未来—』東京都アジア人材育成基金.
- メリアム, S. B. (2007)『質的調査法入門: 教育における調査法とケース・スタディ』堀薫夫, 久保真人, 成島美弥 (訳) ミネルヴァ書房. (Merriam, S. B. (1998) *Qualitative research and case study applications in education.* (revised).

- San Francisco: Jossey-Bass Publishers.)
- Cenoz, J., Gorter, D. (2008) Linguistic Landscape as an additional source of input in second language acquisition. *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*. 46(3): 257-276.
- Garcia, O., Li Wei (2014) *Translanguaging: Language, bilingualism and education*. London, England: Palgrave macmillan.
- Li Wei (2011) Moment Analysis and translanguaging space: Discursive construction of identities by multilingual Chinese youth in Britain. *Journal of Pragmatics* Volume 43, Issue 5:1222-1235.
- Pennycook, A., Otsuji, E., (2014) Metrolingual multitasking and spatial repertoires: 'Pizza mo two minutes coming'. *Journal of Sociolinguistics* 18(2): 161-184.
- Malinowski, D., Dubreil, S. (2019) Linguistic Landscape and Language Learning. (<https://doi.org/10.1002/9781405198431.wbeal1492> 最終アクセス日2020年11月1日)